

プロローグ

すでに20年前になるが、1991年8月に東京で開催された第5回国際シェイクスピア学会の統一テーマは“Shakespeare and Cultural Traditions”(シェイクスピアと文化的諸伝統)であった。各国でのシェイクスピア受容の有り様を積極的に認めようとするテーマである。その後国際情勢はグローバリゼーションの時代に入り、さらにグローカリゼーションの時代に入ったとも言われるようになった。本論ではこうした時代の中でのシェイクスピアの捉え方について書誌の分野を中心に考察していきたい。

1 グローバリゼーション時代の文学をどう考えるか

グローバリゼーション時代の文学を考える前に、簡単に「グローバリゼーション」の定義を確認しておきたい。

どんな言葉も定着するまでには様々なプロセスを辿る。「グローバリゼーション」の定義とその見解を時系列的に見て行くことにする。まず英語の表記ということから、英語で最も権威のある *The Oxford English Dictionary* を見ると、“globalization”は、1989年の第二版では項目として取り上げられ、“the act of globalizing”と定義されている。初出の説明をみると、1961年のウェブスターの“globalization”の項目があり、1962年10月5日の『スペクテイター』では“Globalisation is, indeed, a staggering concept.”という例文を紹介している。新聞記事上の使用例として、1983年8月の『ワシントンポスト』では、自動車産業の国際競争を報じた記事の中で、1984年7月の『フィナンシャル・タイムズ』では、液体洗濯洗剤を日米別々の名前で売り出したとの記事に“globalization”の表現が使われている。

Globalization is the degree to which the same set of economic rules applies everywhere in an increasingly interdependent world. Often the economic rules center on capitalism. ⁽¹⁾

もともとは経済用語として誕生したが、その表すものも拡大してきたようだ。

「グローバル化」すなわち globalization は直訳すれば「地球規模化」となるこの現象は現在の国際文化関係の特徴そのもので、主権国家間の国境を越える多国籍企業の活動を可能にする世界的規模の金融市場の発達、技術の移転、情報の伝達と人の移動の高速化、工業製品、農産物、海産物などの大量で迅速な運搬技術の普及などに伴う文化の交流があげられる。しかし、2001年の7月、ミラノで開催されたG8首脳会議の会場が、警備過剰ではないかと非難されるほどの警戒態勢の中で起こった団体を中心とする反グローバル化運動のデモ隊に囲まれた事実が示すように、グローバル化は、各主権国家間の無秩序な国際関係というカオスの中で、超大国の権力と文化の地球規模の支配を許し、各民族のアイデンティティを消滅させるという反面をもっている。⁽²⁾

さて、このグローバリゼーションについて佐藤幸男「国際政治とグローバリゼーション—国際理解のすすめ方—」(2002)ではグローバリゼーションという概念が広く普及した背景には大別して次の三つの要因を挙げている。

まず第一に、冷戦の終焉という事態があげられる。これによって「東西に分断されていた国際社会がひとつになった」という

認識が生まれた。

次に、環境問題や資源・エネルギー問題、食料・人口問題などの地球規模の危機が顕在化し、それに対する人々の関心が高まったことである。(中略)最後は、第一と第二の要因とも深く関連することであるが、情報・通信技術の著しい発展が挙げられる。低廉な長距離通信、新しいコミュニケーション手段(衛星方法、ケーブルテレビ、携帯電話、コンピュータ・ネットワークおよびインターネットなど)の爆発的な普及が、世界中の人々の生活に大きな変化をもたらし、「ひとつの地球」というイメージが広く共有されるようになった。言い換えれば、「グローバリゼーション」という概念は、世界の縮小と、一つの全体としての世界という意識の双方に結びついており、意識的であれ、無意識的であれ、「ひとつの地球における世界」という認識と深く関わるものである。⁽³⁾

つまり、このことはハムレットの演劇観“mirror upto nature”(自然に対して鏡を掲げて)そのものということになる。言い換えれば「時代に対して鏡を掲げて」という意味としてとらえることができる。

現代を映し出す鏡としてのグローバリゼーションは、そもそも近代世界が創りだした知の体系、なかでも「西欧」文明の支配を正当化する文化的言説、自由と平等を標榜しながらも人種・性差別的な近代秩序を支えている歴史認識、進歩と国益からの自由になれない社会科学全体に疑義をはさみ、「近代」を問いなおすなかから生まれたキーワードなのである。⁽⁴⁾

こうした状況は1990年代以降、PCやインターネットの急速な普及

と無縁ではないだろう。

「グローバリゼーション」という語が示唆する社会変化は、「国際化」と「情報化」という二つの語が示唆する社会変化を複合したような現象を指すものと考えることができよう。「グローバリゼーション」は、従来異なった地域に住む人々を隔ててきた山岳、河川、海洋といった地理的な制約を取り除き、また衛星放送の即時性に見られるように時間的な制約をも取り除き、世界中すべての人々を巻き込むような社会変化である。⁽⁵⁾

2002年以降には『現代用語の基礎知識』をはじめ、多くの文献に「グローバリゼーション」は登場することとなる。当初は経済界で使われ始めた言葉も、今や自然に受け入れられている。国家という枠組みから地球全体を考えるとという方向に世界が確実に動いているというのが理由であろうか。2003年3月に政府が発表した「今後の国際文化交流の推進について(報告)」にも「グローバリゼーション」がキーワードとして使われていることも付け加えておきたい。

グローバリゼーションと文学を扱った Suman Gupta. *Globalization and Literature* (2009)について触れておきたい。本書のおもな内容は以下の通りである。ここでは特に英語の出版物について触れている。

- 1 The Nuances of Globalization
- 2 Movements and Protests
- 3 Global Cities and Cosmopolis
- 4 Literary Studies and Globalization
- 5 Postmodernism and Postcolonialism
- 6 Academic Institutional Spaces

7 The Globalization of Literature

ここでは“7 The Globalization of Literature”に注目しておきたい。特に、書誌的なアプローチの研究ではこの問題は予断を許さないからだ。“the globalization of the book industry”⁽⁶⁾のことである。John B. Thompson. *Books in the Digital Age* (2005)に言及しながら、“the digital form may become the dominant medium of the literary studies text”⁽⁷⁾と述べている。これはいわゆるデジタルコンテンツ産業の大きな側面とも言える。さらにインターネット経由でオンラインによるオン・デマンド方式の出版も現代では定着しており、今後はe-book（電子書籍）の進歩により、文学のテキスト研究は格段に進むものと思える。

2 グローカリゼーションとは何か

ここ数年は「グローバリゼーション」から「グローカリゼーション」(glocalization)という用語も登場し、定着している。発音では「グローカライゼーション」という場合もあるが、この用語は「グローバリゼーション」と「ローカリゼーション」の複合語ということになるのであろうか。鈴木貞美『日本の文化ナショナリズム』(2005)の中で次のように紹介されている。

今日のグローバリゼーションによって、地球上の文化の均質化が進んでいる。だが、それに反発し、地域や国家の特色を出そうとする動きも盛んになっている。グローバリゼーションとローカライゼーション(localization, 地域化)というふたつの相反する動きが、セットになって現れている。それを一語に縮めて、グローカライゼーション(glocalization)ともいう。⁽⁸⁾

書名に「グローカリゼーション」が使用されているものあり、その中の定義も見ておきたい。

「文化接合」というアプローチ、さらに、一歩進んで「グローカリゼーション」および「翻訳的(読み換える)適応」というアプローチで、小規模社会から大規模社会までを扱っている。なお、「グローカリゼーション」という用語は、ロバートソン(1992)も指摘しているように、*Oxford Dictionary of New World*にも載っており、もともとは日本のマーケティング業界で使われていた語である。たしかに一九九〇年代「Think globally, act locally」という広告のコピーがあったが、そうした意味で使われていたようだ。ロバートソンは、「二十世紀末の『現実の世界』が、現代生活のマクロの側面という意味でのグローバルなものを、ミクロの側面という意味でのローカルなものに連結させようとしていることに留意しなければならない。」(ロバートソン 192:172-4)としているが、本書のタイトルにもそうした意味が含まれている。⁽⁹⁾

引用中にあるロバートソンの『グローバリゼーション』には「グローバリゼーション」と「グローカリゼーション」の次のような端的な定義があるので、2箇所について紹介しておきたい。

グローバリゼーションの概念は、世界の縮小と、一つの全体としての世界という意識の増大の双方に言及する。⁽¹⁰⁾

グローカリゼーションの概念は、私の使い方では、もろもろの考え方や産品が、一つの全体としての世界及び諸地方に、同時に、市場化される傾向の増大を指している。かなりの期間にわ

たつて、「グローバルに考えよう、ローカルに行動しよう」という標語が使われてきている。私の主張は、ますます多くの人々が、グローバルにかつローカルに、考えかつ行動するようになってきている、ということである。⁽¹¹⁾

「グローカリゼーション」はもともと「反グローバリゼーション」を支える「ローカル」な文化、文化の多様性を追求することである。言ってみれば均質性を求める「グローバリゼーション」と地域化(個別化)を求める「グローカリゼーション」という相反する考え方を同時に行おうとする考え方と言ってもいいかもしれない。

「グローバリゼーション」と「グローカリゼーション」、均質化と地域化にしろ、重要なのはバランスということになりはしないだろうか。西洋社会の二元論的な考え方ではなく、どう考えていくかということこそ突破口があるように思える。

かつて、マケドニア・アレクサンダー大王の政策やパクス・ローマの時代を見ても、まさに「グローバリゼーション」と「グローカリゼーション」、均質化と地域化のバランスが問われて来たように思える。もちろん、グローバルな物の見方が異なっていたが。時代も変わり、政治体制も変わっても、シェイクスピアの歴史劇風流に言えば、秩序の回復こそが時代を救うことになるのだろうか。

3 世界のシェイクスピア

「日本のシェイクスピア」は世界のシェイクスピアの一つにすぎない。では、「日本のシェイクスピア」の意義について考えなければならないだろう。

1991年の第5回国際シェイクスピア学会を境に日本でもようやく日本人としてのシェイクスピアの在り方を捉えようという機運が高まった。それ以前にも坪内逍遙(1859-1935)にはじまり、豊田

実（1885-1972）、柳田泉（1894-1969）、河竹登志夫（b.1924）等が日本人としてのアイデンティティを意識しつつ、受容研究に取り組んで来たが、グローカリゼーション時代を迎えると、「世界の中のシェイクスピア」のひとつとして「日本のシェイクスピア」を捉える視点が強くなっている。これを客観的に見ようとする、シェイクスピア事典・辞典の扱いに注目することは強ち無意味ではない。これまでも「日本」の項目は取り上げられることはあったが、「Ⅶ世界のシェイクスピア」という項目が荒井良雄他編『シェイクスピア大事典』（2002）には収録されているが、これまでの倉橋健編『シェイクスピア辞典』（1972）、福田恆存監修『シェイクスピアハンドブック』（1987）、高橋康也『シェイクスピア・ハンドブック』（1994）、高橋康也他『研究社シェイクスピア辞典』（2000）には「世界のシェイクスピア」は項目立てされていない。

「Ⅶ 世界の中のシェイクスピア」には以下のように下位項目が設定されている。

§1 概観

§2 英語圏のシェイクスピア

§3 非英語圏のシェイクスピア

1. ドイツ
2. フランス
3. イタリア
4. スペイン
5. ロシア
6. ポーランド他、東欧諸国
7. 北欧諸国（スカンジナビア）
8. 南アフリカ
9. インド

10. 中国

11. 韓国

この項目ではシェイクスピア研究と上演の現状に情報を提供してくれるものを記載している。ここで重要なことは、研究者ごとの項目立ではなく、国別になっている点だ。日本については「XIV 日本のシェイクスピア」として別項目立されている。

「概観」としては世界最大の情報提供力を持つアメリカのフォルジャー・シェイクスピア・ライブラリー発行の *Shakespeare Quarterly*, *World Shakespeare Bibliography* である。世界各国においてシェイクスピア研究、上演が行われているが、こうした情報についても収集しているのがフォルジャーである。1991年の国際シェイクスピア学会が東京で開催されたもう一つの意味は、初めてアジアで開催されたという点である。ここで日本からの情報提供して紹介されているのが、*Shakespeare News from Japan* (駒澤大学シェイクスピア・インスティテュート)、*Shakespeare Studies* (日本シェイクスピア協会)、*Shakespeare Translation, Shakespeare Worldwide* (雄松堂) が紹介されている。⁽¹²⁾ 筆者自身は *Shakespeare News from Japan* の編集主幹を務め、1991年から *World Shakespeare Bibliography* の James Harner 氏からの要請もあり、ワールド・シェイクスピア・ビブリオグラフィ日本代表として情報を提供し続けている。この機会に Harner 氏よりの手紙を資料として公開しておきたい。この手紙が届いた経緯は 1991年8月に開催された第5回国際シェイクスピア学会に合わせて出版した *Shakespeare News from Japan* を海外から来ていた研究者の方々に学会の会場で無料配付したが、その後9月11日付けの手紙が届いたのである。考えられることは James Harner 氏自身が会場で本誌を入手したか、あるいはその関係者を經由して手にしたかのどち

らである。(13) なお、文面に出てくる Professor Arai とは、『シェイクスピア大事典』編集者のひとりである荒井良雄(b.1935)のことである。

World Shakespeare Bibliography

Department of English
Texas A&M University
College Station, TX 77843-4227
409-845-3400

Editors:
Harrison T. Meserole
James L. Harner

19 September 1991

Takashi Sasaki
Chief Editor, Shakespeare News from Japan
1-30-4, Kitakano
Saiwai-ku, Kawasaki 211
Japan

Dear Mr. Sasaki,

Professor Meserole and I are indeed honored to have such eminent scholars as you and Professor Arai join the International Committee of Correspondents. We look forward to a long and mutually beneficial association.

I want to thank you for the copy of your Complete Catalogue of Shakespeare in Japan, which will find a welcome home in our working library. It is, indeed, an impressive bibliography and one that, I am certain, has been warmly received by Shakespearean scholars in Japan. I certainly urge you to publish this in English also. As you are well aware, too little Japanese scholarship is known in the West.

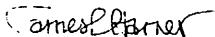
I also want to commend you on Shakespeare News from Japan, a much-needed survey that will help to introduce Japanese scholarship to a wider audience. We were able to use much of volume 1 for the 1990 World Shakespeare Bibliography, and we look forward to seeing volume 2.

I am sending, by book post, copies of the 1988 and 1989 World Shakespeare Bibliographies. As a member of the International Committee, you will receive a complimentary subscription to Shakespeare Quarterly (including the Bibliography issue).

I am enclosing a copy of my original letter to Professor Arai, since that includes information about our procedures. In addition, I am enclosing some instruction sheets that we provide to new members. However, as I told Professor Arai, we can use information in the form you provide in Shakespeare News from Japan.

Again, we are delighted to welcome such a distinguished bibliographer to the Committee.

Yours sincerely,



James L. Harner
Editor
World Shakespeare Bibliography

現在はできるだけ年報の形式でまとめ、継続的に World Shakespeare Bibliography に報告している。このことは日本シェイクスピア協会公式ホームページでも紹介されている。

これまで日本人による研究成果は、故小津次郎元会長の時代から数名の correspondents の方々により幅広い情報が提供されてきました。しかし、そのあまりに膨大な数ゆえに全体を網羅することはしばしば困難で、現在は「単行本」と「上演」に関する情報が武蔵野学院大学佐々木隆教授から提供されています。協会はここに「論文」を加えることとし、会員のみなさまからの情報を仲介することで、データベースとしての WSBO にいっそう厚みを持たせたいと考えています。(14)

海外では Leslie Dunton-Downer and Alan Riding. *Essential Shakespeare Handbook* (2004) が出版され、日本では水谷八也・水谷利美訳『シェイクスピア・ヴィジュアル事典』(2006)として出版されているが、この中では“Global Shakespeare” (世界のシェイクスピア) として項目が設定されている。その中では次のように説明されている。

What is the secret of Shakespeare's international appeal? One answer can be found in Shakespeare the universal storyteller: his plays reach beyond any single language or country. Even when set in a time and place, they often seem timeless and placeless. Their innovative structures — “high” and “low” themes, interwoven plots and subplots, penetrating soliloquies—transcend national theater conventions. (15)

1991年以降、まさに世界のシェイクスピアが各国の立場で取り組まれるようになり、世界に向けての発信が盛んになってきたことは

事実だ。これには第5回国際シェイクスピア学会が東京で開催されたこと、また、その後はインターネットの普及により情報発信や情報交換の利便性が格段にアップしたことが大きな原因ではないだろうか。

4 「日本のシェイクスピア」をどう考えるか

シェイクスピアに限らず、日本人が外国文学を読み、研究するとはどういうことであろうか。イギリス人だけがシェイクスピアを理解できるのだろうか。『シェイクスピアはわれらの同時代人』(*Shakespeare Our Contemporary*, 1964)を書いたヤン・コット(Jan Kott, b.1914)はポーランド人、シェイクスピア批評でも忘れることのできないシュレーゲル(August Wilhelm von Schlegel, 1767-1845)やゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832)はドイツ人である。その国の文化的諸伝統を背景にして、シェイクスピアは世界中に存在する。シェイクスピアが単にアカデミックな研究対象にしかならないのではなく、彼の死後も時空を超えて論じられているのは、レベルの差はあれ世界中の人がシェイクスピアのことを知っていると言っても過言ではない。

「日本のシェイクスピア」を定義しようとすれば、「日本におけるシェイクスピアの翻訳・研究・上演などのシェイクスピアということになろう。日本人としてのアイデンティティも当然問題となってくる。「日本のシェイクスピア」は単なる地理的な問題ではないのだ。

「国際化」の問題を考える前に、自文化におけるシェイクスピアについて考える必要がある。それには、「日本のシェイクスピア」の定義が必要であろう。倉橋健編『シェイクスピア辞典』(東京堂, 1972年8月)、高橋康也他編『研究社シェイクスピア辞典』(研究社, 2000年11月)には「日本におけるシェイクスピア」・「日本」の項目がある。『シェイクスピア辞典』では「日本におけるシェイクスピア

ア」の項目があり、そのほとんどが受容史的な記述である。一方、『研究社シェイクスピア辞典』では、「日本」の項目があり、高橋康也が担当し、内容は単なる受容史にとどまらず、日本におけるシェイクスピアの変容について記述されている。

外国から演出家を招くことはすでに珍しくないが、鈴木が細川俊夫作曲のオペラ『リアの物語』（歌詞は英語、歌手は多国籍）を演出してミュンヘンで初演したり（1998 [平成 10]）、蜷川演出によるロイヤル・シェイクスピア劇団の『リア王』に真田広之がフルの役で出演する（1999 [平成 11]）という、かつては想像もできなかったような「国際的」事態が出現しつつある。⁽¹⁶⁾

さらに演劇における国際文化交流にも触れている。

実際、「日本のシェイクスピア上演」は 1996（平成 8）年の国際シェイクスピア学会のセミナーのテーマとして取り上げられた。こうした研究の面においても国際化は進行し、笹山隆などの日本人が編集・執筆に加わった英文論集が数冊、英米の出版社から公刊されたほか、日本シェイクスピア協会創立 35 周年記念英文論文集もアメリカの出版社から 2000 年に刊行された。⁽¹⁷⁾

学術交流もさらに進んでいることを明らかにしている。「日本のシェイクスピア」とは何かという最も簡単な定義は「日本（日本人）におけるシェイクスピアの翻訳・研究・上演などのシェイクスピアに関する活動、あるいは日本におけるシェイクスピア受容史に関する研究」ということになろう。英語では“Shake-

spere in Japan" "Japanese Shakespeare" "Japanized Shakespeare"とよく表現されている。1991年の第5回国際シェイクスピア学会の統一テーマにも掲げられた"Shakespeare and Cultural Traditions"が示すように、文化的諸伝統を背景に「シェイクスピアの変容」を積極的に受け入れようとするのである。

"Shakespeare in Japan"としてすぐに思い出されるのは豊田実の *Shakespeare in Japan* (Iwanami Shoten, 1940)、最近では安西徹雄・岩崎宗治等が外国人シェイクスピア学者と編集した *Shakespeare in Japan* (The Edwin Mellen Press, 1999)があげられよう。また、上演に内容を絞った南隆太他編の *Performing Shakespeare in Japan* (Cambridge University Press, 2001)もある。論文では川地美子の"Shakespeare in Japan" (『杏林大学外国語部紀要』創刊号, 1989) などもある。"Japanese Shakespeare"というタイトルの研究書は出版されていないものの、笹山隆編の *Shakespeare and the Japanese Stage* (Cambridge University Press, 1998)の Part I は"Japanese Shakespeare in performance"となっており、前述の *Performing Shakespeare in Japan* には安西徹雄の"What do we mean by 'Japanese Shakespeare'?"が所収されている。安西はその中で日本のシェイクスピア劇上演について、

The apparent Japanesque features of their productions are nothing more than an incidental outcome, and not the goal, of their own creative activities. ⁽¹⁸⁾

と述べている。日本人にとってシェイクスピア劇は伝統演劇に匹敵する何か新しいものをつくり出そうとした創造的活動の産物なのである。しかし、伝統演劇に匹敵する演劇を求めながらも、蜷川幸雄

(b.1935)や鈴木忠志(b.1939)といった伝統演劇の要素を取り入れた演出が評価されているのは、偶然の産物と片付けられるのだろうか。Oscar James Campbell 他編の *The Reader's Encyclopedia of Shakespeare* (1966)には“Japan”の項目がある。そこでは、日本のシェイクスピア劇上演史を辿りながら、

The “Japanese” Shakespeare was thus very well established in the commercial theatre at a time when the “English” Shakespeare there was, understandably a rarity. ⁽¹⁹⁾

の記述がある。また、安西徹雄等編の *Shakespeare in Japan* の書評となっている Suematsu Michiko の“Japanese Shakespeare” (*The Renaissance Bulletin*. 26. 1999)では1991年の第5回国際シェイクスピア学会以来の傾向を

a growing interest in cross-cultural studies and reception studies encourage the Japanese to demonstrate what their scholarship has achieved. ⁽²⁰⁾

と評している。石原孝哉の“Shakespeare as Japanese Culture” (『駒澤大学外国語部研究紀要』第28号, 1999)には“Japanese Shakespeare”の項目が立てられている。“Japanized Shakespeare”という言葉は書名としては登場していないが、英語論文の中で“Japanization”などの表現や日本の伝統芸能の上演から“Kyogenising Shakespeare”のような表現も見受けられる。“Japanized Shakespeare”は上演に関する記述に多く用いられているようだ。本来、「日本のシェイクスピア」は「日本(日本人)におけるシェイクスピアの翻訳・研究・上演などのシェイクスピアに関

する活動、あるいは日本におけるシェイクスピア受容史に関する研究」と言った広い意味で考えられていたはずである。しかし、第5回国際シェイクスピア学会を境に「日本のシェイクスピア」は「日本独自のシェイクスピア」を求める方向性を強く意識するようになり、この方向性はシェイクスピア劇上演に特に現れたようだ。この10年間における「日本のシェイクスピア」の関心事は、“a growing interest in cross-cultural studies”⁽²¹⁾であり、“Shakespeare as Japanese Culture”⁽²²⁾に向けられてといっても過言ではないだろう。一方的な異文化理解から自文化の見直しが加わったことで、日本人としてのアイデンティティがあらためて再認識されることになり、「日本のシェイクスピア」に深みがますことになったのだ。三好弘『断絶と孤独—シェイクスピア』(1972)の「ひとつのシェイクスピアの見方」の中では「西洋のシェイクスピア論の背後には、キリスト教の論理があるのは周知のとおりだ。日本にはどのような論理があるだろうか。日本の文化のなかで、シェイクスピアを理解する論理とは何か。・・・(中略)・・・日本文化を仏教というひとつの思想に還元して、シェイクスピアをとらえようというわけだ」⁽²³⁾とある。また、『シェイクスピアと日本人のこころ』(1983)の「まえがき」では「シェイクスピアを読んで考えるとは、日本人のこころで新しい意味を見通すことである」⁽²⁴⁾と述べている。三好弘は「ハムレットと阿闍世コンプレックス」(1984)を発表し、エディプス・コンプレックスから見るハムレットではなく、古澤平作(1897-1968)の阿闍世コンプレックスからハムレットを見るなど、さらにその考察を深めた。

R.H. ブライス(R. H. Blyth, 1898-1964) の *Zen in English Literature and Oriental Classics* (1942)ではシェイクスピアと禅を結びつけた研究論文が所収されており、後年 Arai Yoshio. *Zen in English Culture* (Hokuseido, 2005)によりブライスの研究をあらた

めて評価している。

Dr.R.H.Blyth is everywhere in this book. The words of Blyth are quoted many, many times. Because this book is Dedicated to the late great Zen scholar, Reginald Horace Blyth, with all greeting and very best wishes, and above all, with my greatest respect to him.

I wrote this book to make Blyth Zen spread and become well-known in the English speaking world. I sincerely hope that this Blyth Zen book will be read by as many people as possible in the whole world. (25)

研究にしる、上演にしる、そこに流れているのは坪内逍遙の精神そのものである。

われわれはわれわれの立場から、われわれの解釈、われわれの趣味に依って、われわれみづからの為の演出を試みるがよい。

(26)

この「日本人としてのシェイクスピア」は、「グローカリゼーション時代のシェイクスピア」を考える時、日本人のアイデンティティを問われる時のひとつの解答になろう。

エピローグ

第5回国際シェイクスピア学会の統一テーマは“Shakespeare and Cultural Traditions”「シェイクスピアと文化的諸伝統」(1991)やグローカリゼーションの考え方の根底にあるものは、これまでの西欧優位から「価値観の多様化と民族のアイデンティティ」を広く

認めた世界全体の「共生」の概念である。特に9・11のアメリカの同時多発テロ(2001)は世界を震撼させたまさにサミュエル・ハンチントン流に言えば「文明の衝突」といことになるかもしれないが、百万の心を持つシェイクスピアは一つの時代だけでなく、あらゆる時代のものであると同時に、一国だけでなく、世界中のものであることを忘れてはならない。

2004年には国際シェイクスピア学会の成果をまとめた Tetsuo Kishi, and Roger Pringle, and Sttanley Wells, editors. *Shakespeare and Cultural Traditions* が出版され、その Introduction の冒頭には次のように記されている。

Vancouver, Washington D.C., Stratford-upon-Avon, Berlin—
World Shakespeare Congress had progressed steadily in an
eastward direction, and in 1991, after significant barriers
between West and East had tumbled down, Tokyo became
the location for the first major Shakespeare conference ever
to be held in the Far East. (27)

同じ様に第5回国際シェイクスピア学会以後に出版された Dennis Kennedy and Yong Lin Lan, editors. *Shakespeare in Asia*(2010) といった研究書では以下のように述べられている。

This book treats contemporary Shakespeare performance in Asia from theoretical and historical perspectives: it is interested in how and why Shakespeare operates on the stage, in film, and in other performative mdoes in regions of the world that have no overwhelming reason to turn to him. The essayists represented here offer questions about cultural

difference and cultural value, appropriation and dissemination, corporeal and intellectual adaptation, and the ways in which Asia is part of and simultaneously stands aloof from global civilization. Much has happened on planet Shakespeare since 1990. For our purposes the most important development has been a notable increase in Shakespeare performance in surroundings alien to the traditions of the main English-speaking nations, some of which has been exported to the West, prompting corresponding expansion in the international critical attention those productions have received in the popular press and in the academy. ⁽²⁸⁾

英語文化圏にとってもアジア諸国のシェイクスピアにとっても、自国や他国のシェイクスピアにようやく目を向ける時代が来たと言ってもよいかもしれない。⁽²⁹⁾ シェイクスピアをかつてコールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) が *Biography Litaria* (1817) の中で “our myriad-minded Shakespeare” (Chapter XV) と讃えたが、グローカリゼーション時代のシェイクスピアを均一性と地域性が共生することは、まさにグローカリゼーション時代のシェイクスピアの捉え方、その有り様そのものであろう。

注

(1) Gudykunst, William B. and Bella Mody, editors. *Handbook of International and Intercultural Communication*. (California: Sage Publications, Inc.), p.12.

(2) 田辺徹『国際文化関係論』(建帛社、2002年4月)、p.8.

- (3) 佐藤幸男「国際政治とグローバリゼーション——国際理解のすすめ方——」（『国際理解』第 33 号、帝塚山学院大学国際理解研究所、2002 年 3 月）、p.9.
- (4) 田中伯知・渡辺淳志「グローバリゼーションと国際化」、pp.24・25.
- (5) 幸泉哲紀・村田鈴子『国際文化学序説』（多賀出版、2004 年 11 月）、p.5.
- (6) Suman Gupta. *Globalization and Literature* (Cambridge: Polity Press, 2009), p.164.
- (7) Ibid., p.170.
- (8) 鈴木貞美『日本の文化ナショナリズム』（平凡社、2005 年 12 月）、p.15.
- (9) 前川啓治『グローカリゼーションの人類学』（新曜社、2004 年 1 月）、p.10.
- (10) ロバートソン／阿部美哉訳『グローバリゼーション』（東京大学出版会、2001 年 8 月）、p.19.
- (11) Ibid., p.16.
- (12) 川地美子／荒井良雄「世界のシェイクスピア § 1 概観」（荒井良雄他編『シェイクスピア大事典』日本図書センター、2002 年 10 月）、p.498.
- (13) 当時筆者は駒澤大学シェイクスピア・インスティテュートで幹事を務め、*Shakespeare News from Japan* の編集を担当していた。8 月 11 日～17 日に開催された国際シェイクスピア学会（会場：共立薬科大学）で連日ブースで対応していたが、手紙が 9 月 11 日とあるので、その対応の早さに驚かされた。当時はまだインターネット上のメールなども普及していない時代だけにこうした私信とはいえ、手紙はひとつの重要な資料的な価値があると考え、今回掲載した。

- (14) 「日本シェイクスピア協会 World Shakespeare Bibliography Online」 (http://s-sj.org/?page_id=14) (2011年8月20日アクセス)
- (15) Leslie Dunton-Downer and Alan Riding. *Essential Shakespeare Handbook* (DK Publishing, Inc., 2004), p.467.
- (16) 高橋康也「日本」(高橋康也他編『研究社シェイクスピア辞典』研究社、2001年11月), pp.502-503.
- (17) Ibid., p.503.
- (18) Anzai, Tetsuo. "What do we mean by 'Japanese Shakespeare'" (Minami, Ryuta, Carruthers, Ian, and John Gillies, editors. *Perfroming Shakespeare in Japan*. Cambridge: Cambridge University Press, 2001), p.20.
- (19) Campbell, Oscar James and E. Q. Quinn, editors. *The Reader's Encyclopedia of Shakespeare*. (Tokyo: Toppan Company, 1960), p.298.
- (20) Suematsu, Michiko. "Japanese Shakespeare". (*The Renaissance Bulletin*, 26. 1999), p.36.
- (22) Ibid., p.36.
- (23) Ishihara, Kosai. "Shakespeare as Japanese Culture" (『駒澤大学外国語部研究紀要』第28号、1999年3月)、pp.1-21.
- (24) 三好弘『断絶と孤独—シェイクスピア』(朝日出版社、1972年4月)、pp.7-8.
- (25) 三好弘『シェイクスピアと日本人のこころ』(公論社、1983年11月)、p.3.
- (26) Arai Yoshi. *Zen in English Culture* (Hokuseido, 2005), p.192.
- (26) 逍遙協会編『逍遙選集』(別冊第5)(第一書房、1978年2月)、p.319.

- (27) Tesuto Kishi, Roger Pringle, and Stanley Wells, editors. *Shakespeare and Cultural Traditions*. (University of Delaware Press, 1994), p.13.
- (28) Dennis Kennedy and Yong Lin Lan, editors. *Shakespeare in Asia* (Cambridge University Press, 2010), p.1.
- (29) Murray J. Levith. *Shakespeare in China* (Continuum, 2004)、Alexander C. Y. Huang. *Chinese Shakespeares* (Columbia University Press, 2009)、Natasha Distiller. *South Africa, Shakespeare, and Post-Colonial Culture* (Edwin Mellen Press, 2005)なども出版されている。

キーワード：シェイクスピア、グローバリゼーション、グローカリゼーション、日本のシェイクスピア

* 「グローバリゼーション」及び「グローカリゼーション」については、既発表の「気になる言葉①グローバリゼーション」(『むらおさ』第1号、2005年1月)、「気になる言葉③グローカリゼーション」(『むらおさ』第6号、2007年12月)、『新しい国際文化交流』(多生堂、2009年9月)で取り上げたものと「世界の中の日本のシェイクスピア」については「シェイクスピアと国際化」(『比較文化史研究』第4号、比較文化史研究会、2002年8月)を再構築の上、適宜加筆修正したことをお断りしておきたい。